

総 合 討 論 (座長：佐藤 静 夫)

(座長：佐藤静夫) 時間の関係上、いまの原田・加藤両氏の講演に対する討論と総合討論をあわせて行うこととするが、いまの加藤氏のお話は示唆にとみ、鶏についてはまさに本日の討論の結論ではないかと思われるが、どなたか発言があればお願いしたい。

(発言：原田良昭) いまの加藤氏のお話の通りで、(鶏ヘモフィルス感染症に対し)われわれもペニシリンを応用して効果がなかったことを経験している。これには薬剤の吸収と排泄の問題のほかにもう一つマイコプラズマなどの混合感染の問題も関係していると思う。

(座長：佐藤静夫) 本日の各演者の講演を要約すると、牛、豚、および鶏由来株の試験管内の成績が主体であったが、結局は最後の加藤氏の話にあったように、これを生体内応用にもってゆくにはどうしたらよいか、という点にあると思う。試験管内のことは先ほどからある程度議論ができたと思うので、実際に薬剤を野外に応用する場合に、現時点ではどうしたらよいか、という点について、できれば各演者にもう一回ご意見をいただきたいと思う。

(発言：加藤和好) 野外では、現在豚のヘモフィルス症はかなり流行しているが、これを薬剤により予防しようという場合に、薬剤の予防量、治療量という言葉がよく使われている。しかし実際問題として、呼吸器感染症の場合に、いわゆる予防量では病気が防げるかという点、そうでない。やはり治療量を与えて、はじめて効果がある。育成養豚場に豚を導入したときには、集中的に4日間ぐらい治療量を与えてはじめて予防ができる。

なお本論とは別のこととして、先ほどの原田氏の講演中で、*H. paragallinarum* の血清型がⅠ型、Ⅱ型という表現があったが、本菌の血清型は、PAGE(1962年)がA、B、Cの3つに分けている。日本ではいままでは分離された株をⅠ型、Ⅱ

型と分けているが、前者はPAGEのA型に、後者はC型にそれぞれ一致し、B型はまだ発見されていない。しかしB型が国内に全くないとはいえないし、将来でてくる可能性もある。したがって私は本菌の血清型はPAGEの分類に従ってA、B、Cの3型にわけるのが妥当だと考えており、先日北研の中瀬氏との話して、同氏も今後この型別を用いると言っているのだから、今後そのようになると思うのでお含み願いたい。

(座長：佐藤静夫) いまの加藤氏のお話にあったように、実際問題として予防の場合でも、治療量でゆくべきだという点について、賛成であれば問題はないが、特に異論等のご意見はないか。

(発言：大田氏?) 加藤氏の発言の主旨には全く賛成である。薬剤の使用書には予防量も書いてあるが、これではかえって菌の耐性化を招くおそれがあり、現実に予防目的で薬剤をつかうときでも短期間に治療量を与えた方がたしかに効果があるようだ。

(座長：佐藤静夫) この問題に関しては、本日話してたどの家畜の場合についてもいえることではないかと思う。ただし鶏(のヘモフィルス症)ではワクチンがあり、他のものにはないので、鶏においてワクチンと薬剤のからみあいの問題について、ご意見があったら原田氏にうかがいたい。

(意見：原田良昭) 鶏の場合に、ワクチンを接種していない例や、ワクチン接種をしていても日数が経過している例では(抗体が低下して)病気がでる場合もあり、このようなときには一般に広域性の抗性物質を5~10日投与し、同時にワクチンを接種するという方法をよく用いている。こうすればよく病気をさえられる。つまり一方でワクチンによる免疫が与えられ、他方で抗性物質を投与している間は菌の感染が防止されるといいうわけで、これでうまく行っていると思われる。

(座長：佐藤静夫) いまのお話しのワクチン

と薬剤の組み合わせという考え方について、加藤氏のお考えはどうか。

(意見：加藤和好) それでよいと思うが、ただ薬剤の中で抗体産性を抑制するものもあるということを以前に文献で読んだ記憶があるので、すべての薬がよいとはいえないと思う。

(座長：佐藤静夫) そのあたりは大変に微妙な問題であり、実験的にやってもかなりケースバイケースで、データのフレ等もあって証明がむづかしいし、薬剤が抗体産生に大きな影響を及ぼすということは、あまりないのではないかと思う。しかしこのことも含め、他にも例えば飼料中のアフラトキシンなど抗体産性になんらかの影響を及ぼす因子もありうるだろうという考慮は必要だと思われる。

本日のシンポジウムの内容は会報に掲載されるので、ご覧いただき、改めて問題点をお考えいただきたい。本日は基礎的な問題からはじまって、薬剤の応用その他具体的な話しがいろいろで、大きな収穫があったことをうれしく思う。

(以上)

(おことわり) 以上の質疑、応答、意見に関しては、当日の録音テープから事務局の責任において集録した。

集録にあたり、各発言者の話しの内容は、紙面の関係上要約したが、その主旨はできるだけ正確に読者に伝わるようにと、表現に努力を払ったつもりである。しかし録音が充分ききとれなかった部分もあり、また集録者が聞きちがったり、意味をとりちがえたりした点もまったくないとはいえない。もしその場合には、あしからずご寛容の上で、ご遠慮なくご指摘いただきたい。後日改めて訂正することとしたい。

なお本文の中でサルファ剤の略号は演者により異っている場合があるが、一応原文のままとした。注) 各サルファ剤の略号については、改めて本研究会で略号を決めることとしたい。

(事務局 高橋 勇)